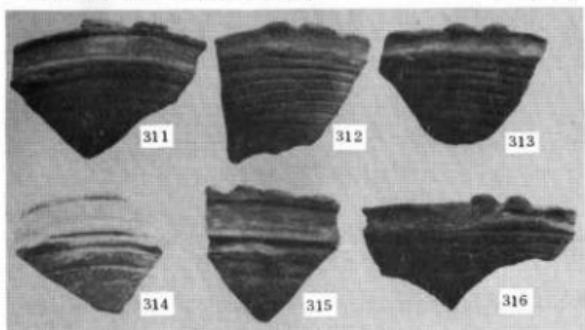


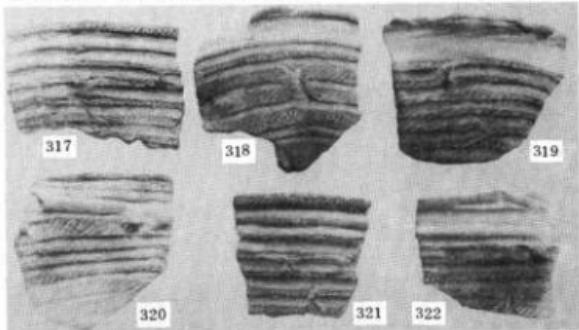
〔A地区H<sub>2</sub>グリットI層出土、土器〕

P・L 47



〔A地区H<sub>2</sub>グリットI層出土、土器〕

P・L 48

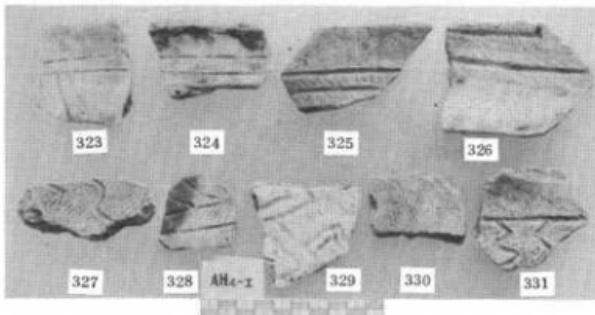


[311～316] →ここに掲げたものは、「大洞A式」粗製鉢形土器である。  
・いずれも頸部に無文帯を有するもので、胴部には入り組み工字文が施  
文されるタイプである。  
④このタイプは「大洞A式」の前半に多く見られるようである。

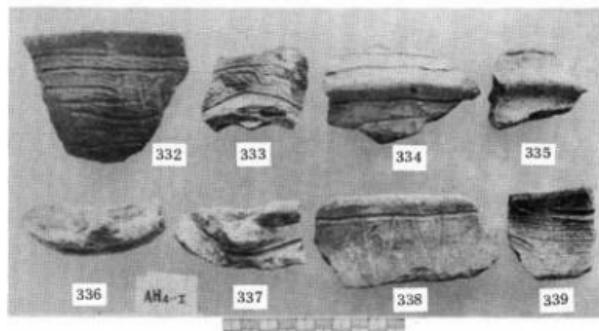
[317～322] →ここに掲げたものも(P・L 47)と同様、「大洞A式」  
粗製鉢形か深鉢形土器である。  
・このうち(317・318・321)は、口端に竜文のあるタイプであり、ま  
た(318・319・322)は頸部に無文帯をもつタイプである。  
・胴部には、入り組み工字文がすべてに施文されるものである。

〔A地区H<sub>4</sub>グリットⅠ層出土、土器〕

P・L 49

〔A地区H<sub>4</sub>グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 50



〔323～331〕→ここに掲げたものは、縄文時代後期「十腰内I式」甕形土器である。

- このうち(323～326・331)は口縁部に横走する沈線があり頸部を区画するものである。
- (327～330)は、縦位の波状沈線のあるもの(227・328・331)、2条1対の平行沈線による幾何的文様のもの(329)、また(330)のように網目状沈線文のものもある。

◎この「十腰内I式」期の土器群は、(P・L 1・13～16)にも示したように基本文様パターンがきわめて多く、その多様なのがこの期の特徴と考えられる。

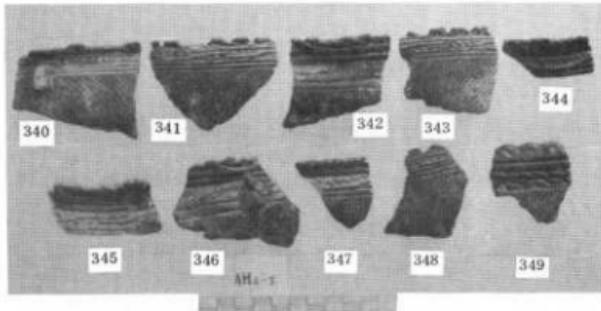
〔332～339〕→ここに掲げたものも「十腰内I式」土器である。

- このうち甕形土器(332・334・339)、壺形土器(333)、および器台(334・335・336・337)に分けられる。

◎この「十腰内I式」期には「器台」の出土数が多いようである。施文は沈線による方形区画文(332)、網目状沈線文(338)、細沈線文(339)、波状文(333)等である。

〔A地区H<sub>4</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 51

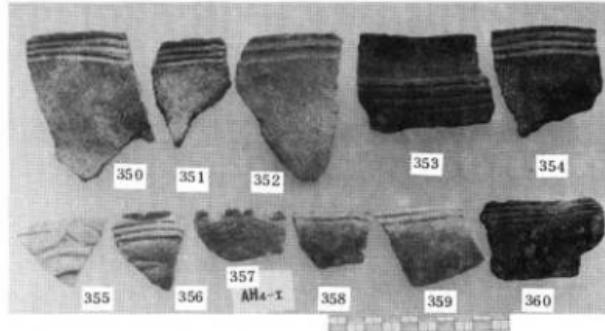


〔340～349〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」粗製鉢形土器である。

- これらの土器のすべてが小波状を呈する口縁を持っている。中には扁平な小突起を付すもの(340・348)もある。
- 頭部から肩部にかけては、平行沈線文と刻目文が施文される。いわゆる「大洞C<sub>1</sub>式」土器のメルクマールとされるものである。
- ◎また、沈線文が曲線的に斜行するものもあるが、これらのものは、前型式である「大洞B・C式」の半衝状文の伝統を残すものである。

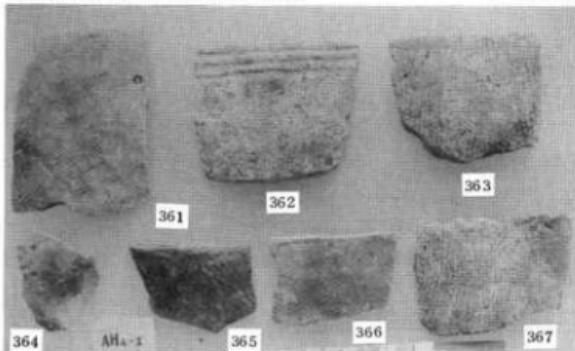
〔A地区H<sub>4</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 52



〔350～360〕→ここに掲げたものも縄文晩期「大洞C<sub>1</sub>式」「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

- このうち(355)は「大洞C<sub>1</sub>式」精製皿形土器で、(356・358・359)は「大洞C<sub>2</sub>式」精製皿形土器である。また、(357)もその仲間であろう。
- (350～354・360)は、「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。このうち(353)は頭部が無文帯のもので、他は、口頸部に3条の沈線文を有するものである。すなわち既述したように、二タイプに分けられる。
- ◎また、縄文はすべて(L・R)である。

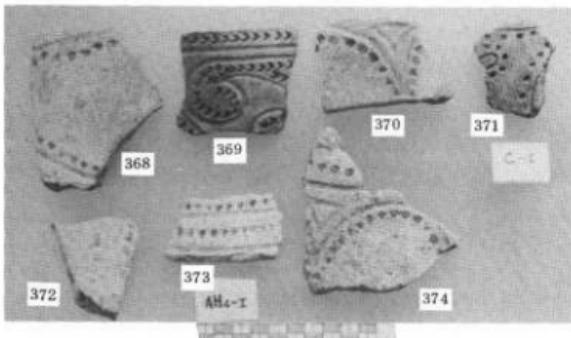


〔361～367〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞B・C式」・「大同C<sub>b</sub>式」土器である。

- このうち(364)は、このたびの発掘でただ1片だけ出土した「大洞B・C式」土器片である。破片のため器形は断定できないが小形の鉢形と思われる。
- (361・363・365・366・367)のうち(367)は波状口縁で、他は平縁である。また、(361・363・365・366・367)は、縄文のみ施文されるタイプである。また(362)は、沈線文のあるタイプである。
- ◎この(361～367)の縄文は、(362)は(L・r)の燃糸文、他は(L・R)縄文である。

〔A地区H<sub>4</sub>、C地区グリットII層出土、土器〕

P・L 54



〔368～374〕→ここに掲げたものは、縄文時代後期「十腰内Ⅱ式」土器である。

・これらのは、AH<sub>4</sub>-II層出土(368～370・372～374)とC地区II層出土(371)のものである。

◎この十腰内Ⅱ式土器は、西北五地方では出土が少なく、当観音林遺跡では、今回が初めてである。

・施文等については次頁で述べることにする。

〔A地区H<sub>4</sub>グリットII層出土、土器〕

P・L 55



〔375〕→ここに掲げたのも縄文時代後期「十腰内Ⅱ式」深鉢形土器である。

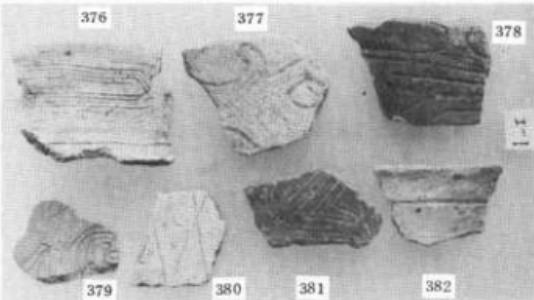
・器形は、口縁部が極端に高くのびる波状口縁のもので、その口縁は4対そびえ立つものである。

・施文は、曲線文と刺突文が回旋するもので、その間に継位の曲線文が垂下するものである。地文は(R・L)縦文である。

◎(P・L 54-368～374)および(375)は、本遺跡は勿論西北五地方では、まとまって出土したのは今回が最初である。

・なお(371)は別個の施文をもつもので、やはり「十腰内Ⅱ式」である。

〔A地区 i グリットV層出土、土器〕

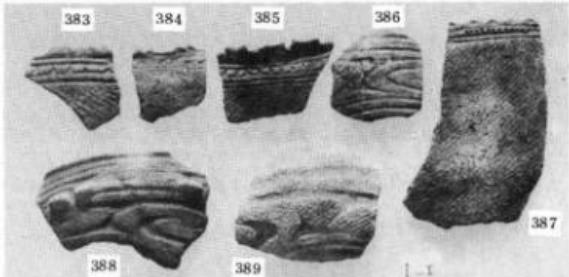


P・L 56

[376～382] →ここに掲げたものは、縄文時代後期「十腹内I式」土器である。

- これらのものは菱形か鉢形土器のものと思われる。このうち(376・377・378・382)は口縁部破片で、ゆるい波状を呈するものと思われる。
- (379・380・381)は、菱形か鉢形土器の胴部破片であろう。さきに述べたとおり、沈線文・細沈線文・網目状文・回旋文等きわめて変化に富んでいるのが特徴である。

〔A地区 i グリットII層出土、土器〕



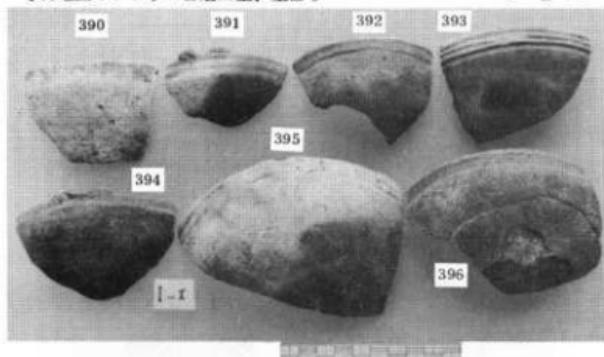
P・L 57

[383～389] →ここに掲げたものは、いずれも縄文時代晚期「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式」粗製・精製土器である。

- (386)は、平行沈線文と曲線文が施文される「大洞C<sub>2</sub>式」精製鉢形土器である。
- また(383～385・387)は、「大洞C<sub>1</sub>式」の粗製鉢形土器である。これらのものには、「大洞C<sub>1</sub>式」のメルクマールである刻目文が口縁部に施文されるものである。
- (388・389)は、「大洞C<sub>1</sub>式」の精製土器で、(388)は鉢形、(389)は菱形土器の胴部破片である。この両者には、太く力強い大健骨文と思われる雲形文がある。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 58



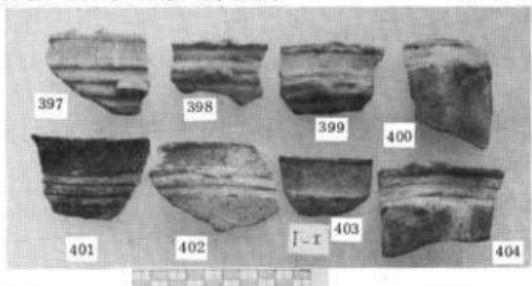
| 113 |

〔390～396〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>・A式」の粗製皿形土器である。

- このうち(394・396)は「大洞A式」のものである。また、(394)は、口頸部の沈線状クボミと肩部の張る器形から、(396)も前者の特徴を有しており、かつ口端の縞文等から「大洞A式」と思われる。
- 他の(390～393・395)は、既に述べた(P・L 2・21・24)の一部のものと同類のものであって「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。
- ◎なお(395・396)の縞文は(L・R)である。

〔A地区 i グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 59

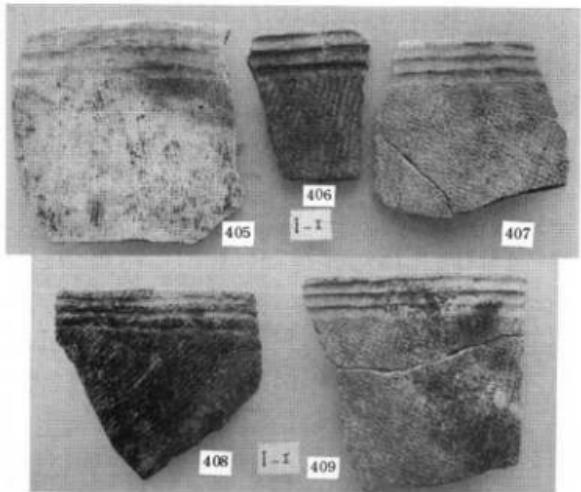


〔397～404〕→ここに掲げた土器群は、「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。

- ◎このうち(397・398・399・401・402・403)は、いずれも頸部が無文帯のもので、「大洞C<sub>2</sub>式」の後半のものと思われる。
- ◎また(400・404)も「大洞C<sub>2</sub>式」土器であるが、両者とも頸部の沈線文や突起の形状から「大洞C<sub>2</sub>式」中葉以降のものと考えられる。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

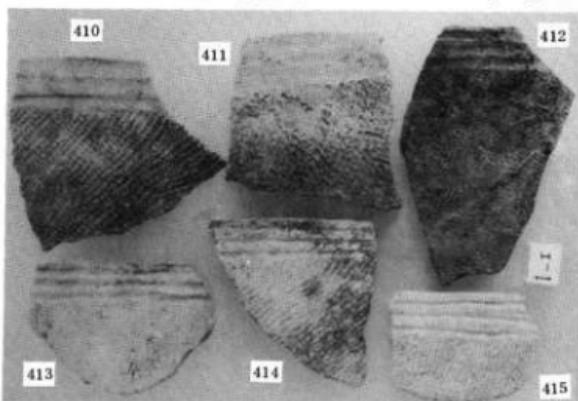
P・L 60



〔405～409〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。  
◎いすれも口頸部に3条を基本とする平行沈線文があるもので、同様の  
パターンの土器が(P・L 7・8・33・34・35・36・40・53)に示してある。

〔A地区 i グリットⅡ層出土、土器〕

P・L 61

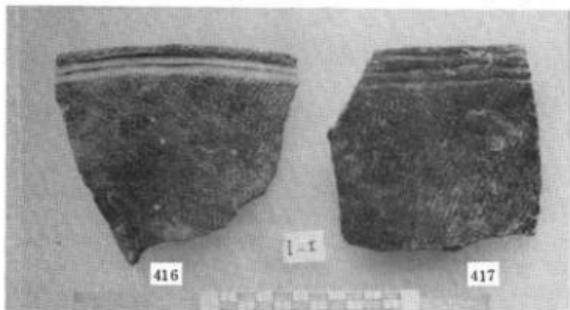


〔410～415〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。

- ・これらのすべてに、3条を基本とする平行沈線文が施文されるものである。
- ・これらのものの胴部には、単節の(L・R)縄文が施文されるもの(410・412～415)、複節(L・R・L)縄文のもの(411)である。
- ・また、(P・L 60)→前ページのものも(L・R)縄文が(406～409)に施文され(405)には(R・L)撚糸文が施文される。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

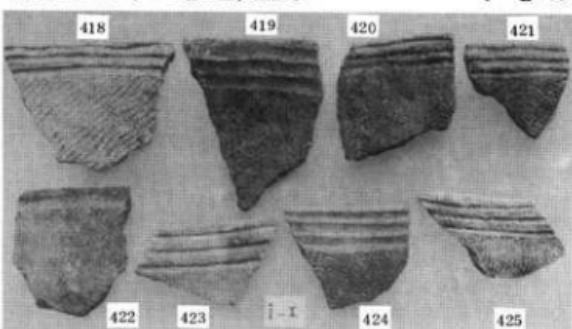
P・L 62



- 〔416～417〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。  
 • このうち(416)の口縁部が肥厚し、頸部が内傾しており肩部が張る器形のものである。このタイプは出土量が少なく、むしろつぎの「大洞A式」に伴うものが多いようである。  
 • (417)は、(P・L61)その他に述べた平行沈線文のあるもので、同タイプのものである。  
 • なお、(416・417)とも胴部の縄文は(L・R)である。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

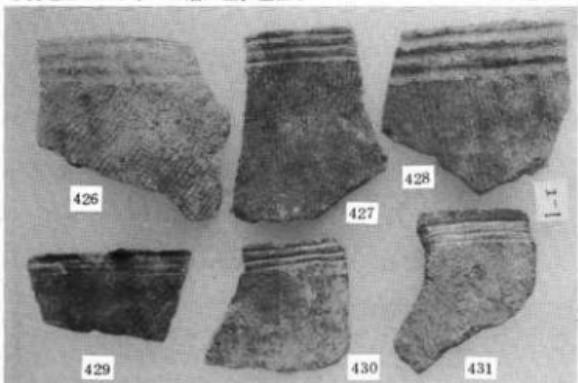
P・L 63



- 〔418～425〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。  
 • このうち(418～421・423～425)には、「大洞C<sub>2</sub>式」の基本パターンである3条の平行沈線文のあるグループである。  
 • また、(422)は、口縁がうすく、肩部より頸部へかけて内傾するもので、「大洞C<sub>1</sub>式」の深鉢形土器と思われる。  
 ◎なお(419)には条痕文、(425)には単軸然糸文、他はすべて左傾する(L・R)縄文が施文される。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 64

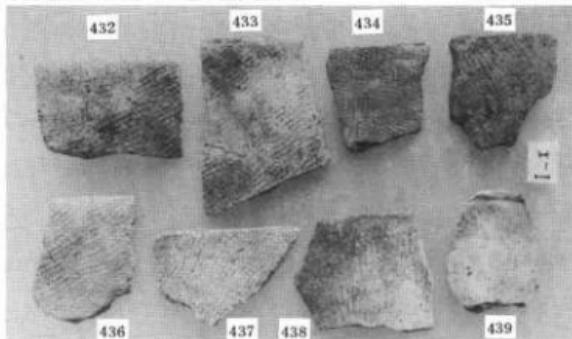


〔426～431〕→ここに掲げた土器群も「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製深鉢形土器である。

- これらのものも「大洞C<sub>2</sub>式」の基本パターンの一つである3条の平行沈線文を口頬部にもつものである。
- このうち、(427・428)は、単軸燃系文が胴部に施文される。その他のものには、左傾する(L・R)縦文が施文されるものである。
- また、(429)は、小形のものであり、(431)は肩部より口縁にかけてやや内傾するものである。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 65

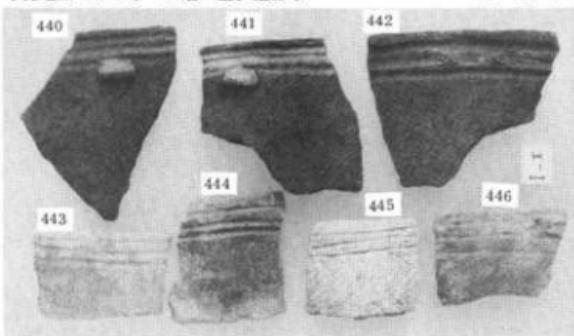


〔432～439〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。

- これらのうち、(439)は、沈線文が1条あるのみで胴部は無文のもので小形の深鉢である。
- 他は、すべて口縁上部より縦文が施文されるものであるが(434・438)は、(R・L)の燃系文が施文され、(432～433・435～437)は、(L・R)縦文である。
- ◎これらの縦文のみ施文される深鉢形土器は、口縁上部が内傾気味のもの、直口のもの、(433)のように頬部付近がやや外反気味のものに細分できそうである。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 66



〔440～446〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」「同A式」の鉢形土器と深鉢形土器である。

- このうち(442)は、「大洞A式」の鉢形、(440・441)は「同C<sub>2</sub>式」の鉢形、(443～446)は「大洞C<sub>2</sub>式」の深鉢形土器である。
- すなわち(442)は平行沈線文と短沈線による2ヶ1対の小突起をもつもので、大洞A式の特徴をもつ、また(440・441)は、平行沈線と粘土粒を肩部に有するもので大洞C<sub>2</sub>式である。

◎(443～446)は既述した3条の平行沈線文をもつグループである。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 67

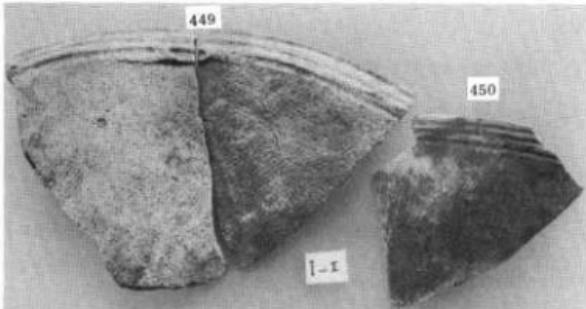


〔447～448〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」の鉢形土器である。

- このうち(447)は、口線上端に刻目文をもつもので、(448)は平線のものである。また、両者ともその頸部に、3条の平行沈線文が施文される。器厚は(447)がうすいものである。
- 両者ともその胸部に龜文が付されるが、(447)は右傾し(R・L)、(448)は左傾し(L・R)龜文である。すなわち、原体の回転方向は←→横方向であることをあらわしている。そして、(R・L)のものは少ない。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

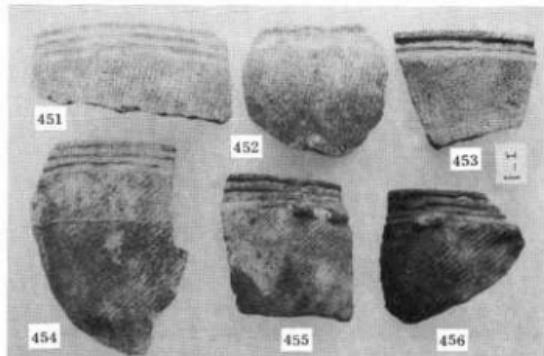
P・L 68



- 〔449～450〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」の粗製皿形土器である。  
 • このうち(449)は、浅鉢形に近い器形のもので大形のものである。また3条の深い沈線文があり、その3条目に2ヶ1対の小突起を多分4対つけるものである。このものは、「大洞C<sub>2</sub>式」でも「同A式」に近いものようである。  
 • (450)も器形は浅鉢形に近いもので、口頸部に3条の沈線文をもつ「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。  
 ◎两者とも縄文が密に施文されるが、左傾するもので、(449)は(L・R)、(450)は、単軸撚糸文で(R・L)である。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

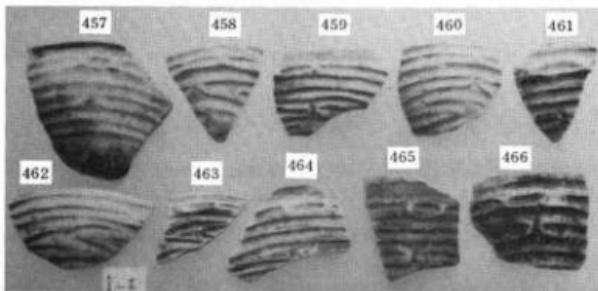
P・L 69



- 〔451～456〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式・A式」の粗製鉢形、深鉢形、壺形土器である。  
 • このうち、(453)は、口縁上端に縄文があり、肩部がやや張るもので、一応「大洞A式」とした。  
 • (452)は壺形、(451)は深鉢形、(454～456)は鉢形土器である。このうち、(452)は、広口壺とみられ、その頸部は無文帯をもつものらしい。  
 • 他の(451・454～456)は、3条の平行沈線文をもつもので、(451)は、(P・L 66～443～446)の仲間であろう。また(454～456)は、既述(P・L 25～73・74)の仲間で鉢形土器の一大タイプとして細分が可能なものである。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 70



〔457～466〕→ここに掲げたものは「大洞A式」精製皿形土器である。

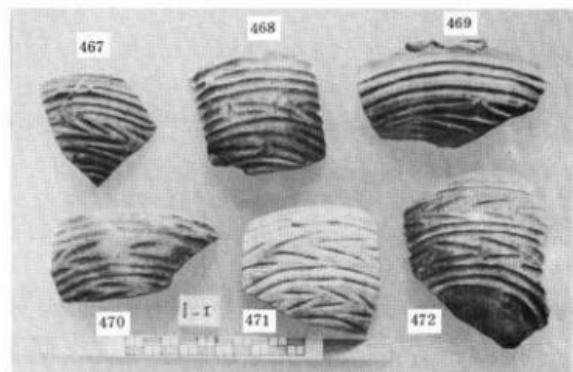
- このうち(457～461・464～466)は、入り組み工字文の完成されたもの(457・459・461・464・465・466)と、未完成のもの(458・460)に細分できる。この未完成の入り組み工字文は「大洞C<sub>2</sub>式」の名残りを痕跡程度残るものである。

- また、(462・463)は、いわゆる矢羽根状文(櫛杉文)のあるもので入り組み工字文の施文されたものと二類に類別できる。

- ◎これらの(457～466)は(P・L 12・41・42・44・46)等にも示したものと同類である。

〔A地区 i グリットⅢ層出土、土器〕

P・L 71



〔467～472〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」「同A式」の精製皿形土器である。

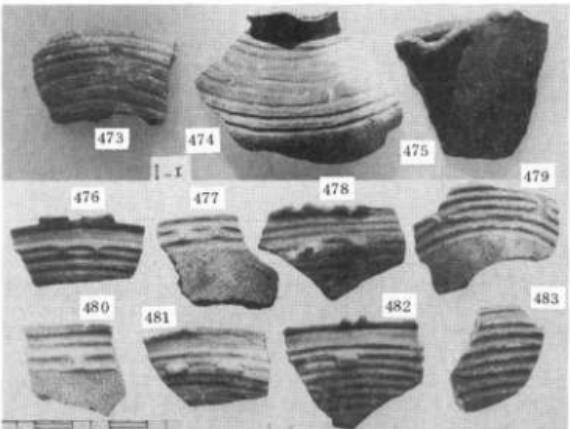
- このうち(467)は、施文される脚部の曲線文から「大洞C<sub>2</sub>式」である。
- (468～472)は、前頁述べた細分方法で云うと、(468・469)と(470～472)に分けられる。(468・469)は、入り組み工字文が未完成のもので、(470～472)は矢羽根状文(櫛杉文)のあるものである。

- ◎前頁で同類について述べたが、晩期の「大洞C<sub>2</sub>～A式」期では、粗製

- 精製を含めて皿形土器はきわめて多い。

〔A地区 i グリットII層出土、土器〕

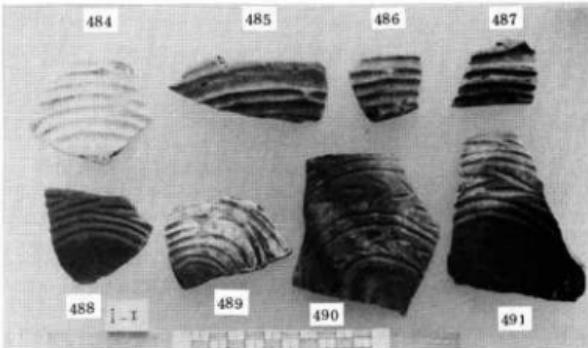
P・L 72



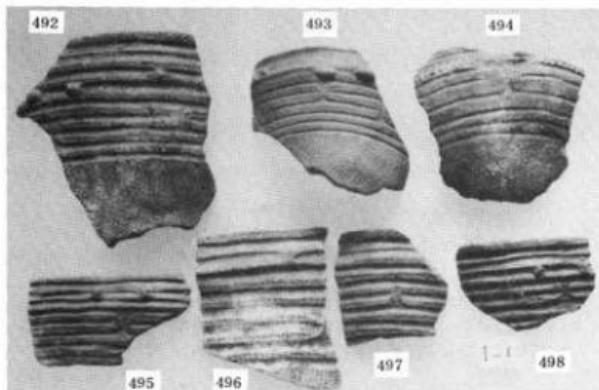
- 〔473～483〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>1</sub>・A式」粗製土器である。  
 • このうち(475)は「大洞C<sub>1</sub>式」粗製片口鉢形土器で、口縁の一端に片口のあるものである。また、(474)は壺形土器である。  
 • 他はすべて「大洞A式」土器で、鉢形土器(476～483)、このうち(479・482)は台付の可能性もある。  
 ◎施文は、(475)を除き、入り組み工字文のもの(473・474・476・478・479・481～483)、(477・480)は、小突起をもつものである。

〔A地区 i グリットII層出土、土器〕

P・L 73



- 〔484～491〕→ここに掲げたものは、「大洞A式」精製皿形土器である。  
 • このうち(484・488～491)には、矢羽根状文(櫛杉文)のあるもので、(485～487)は、入り組み工字文のものと思われる。  
 ◎④「大洞A式」土器には、「入り組み工字文」と「矢羽根状文」の二種のメルクマール文様がある。

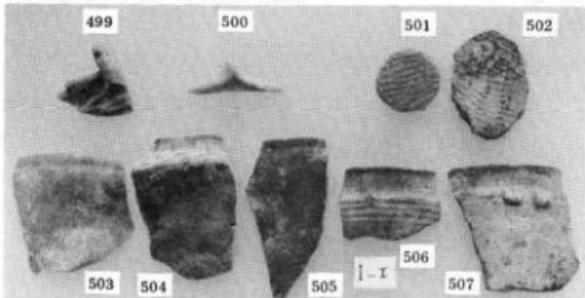


[492～498]→ここに掲げたものも「大洞A式」粗製鉢形・深鉢形土器である。

- このうち、(492・496)は深鉢形、他は鉢形土器と思われる。また、(493・494)は台付鉢形らしい。
- いずれも「入り組み工字文」を施文するもので、縦文を胴部下半に施文されるものが多いようである。

〔A地区 i グリットⅠ層出土、土器〕

P・L 75

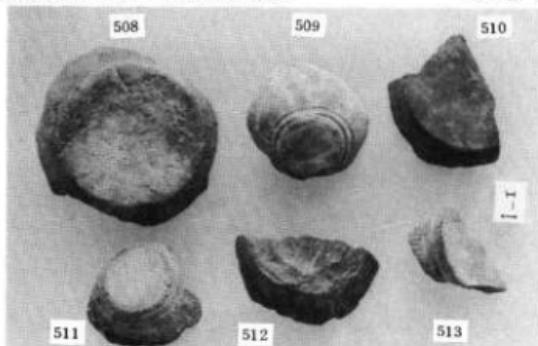


〔499～507〕→ここに掲げたものは、口縁部突起、円盤状土製品、鉢形土器等である。

- (499・500)は、口縁部突起で「大同C<sub>2</sub>式」鉢形土器のものらしい。
- (501・502)は、土器片を活用した円盤状土製品である。このものは縄文のみで型式名は不明なるも、このグリットからは、「十腰内Ⅰ式」と晩期の土器のみの出土であるから、そのいずれかの土器片であろう。
- (503～507)は、鉢形土器で(503・506・507)は、「大洞C<sub>2</sub>式」、(504・505)は、「大洞C<sub>1</sub>式」と思われる。

〔A地区 i グリットⅠ層出土、土器〕

P・L 76

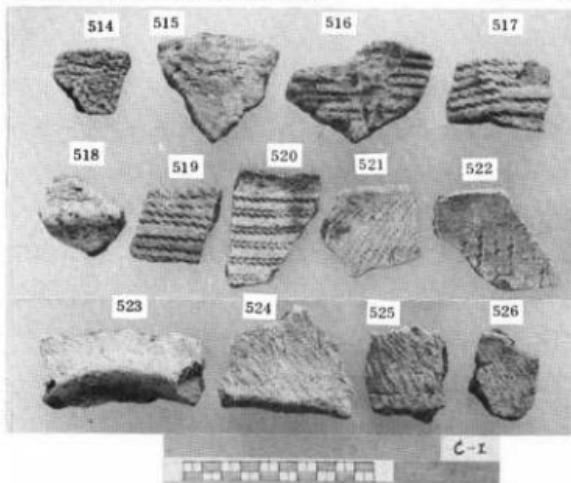


〔508～513〕→ここに掲げたものは、縄文時代晚期の「大洞C<sub>2</sub>式」土器底部である。

- このうち、(509・510・511・513)には、底部直上に沈線文がめぐるもので、(509)は平底、(510・511)はやや上げ底である。
- また、(508・512)は上げ底である。

[C地区CDトレンチII層出土、土器]

P・L 77

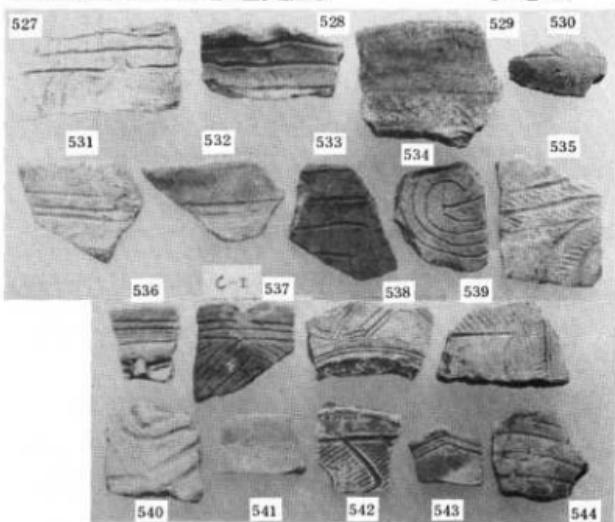


[514～526]→ここに掲げたものは、縄文時代「前期」と「中期」の円筒土器である。

- このうち、(514・515・523～526)は、前期の土器で、このうち、(518・523～526)は「円筒下層a式」土器である。
- また、(516・517)は、「円筒下層d式」土器である。
- 中段のうち(519・520)は、「円筒上層a式」、(521)は縄文晚期、(522)は後期のものようである。
- ④なお、(520・522)は、類例を待って再考したい。

[C地区CDトレンチII層出土、土器]

P・L 78

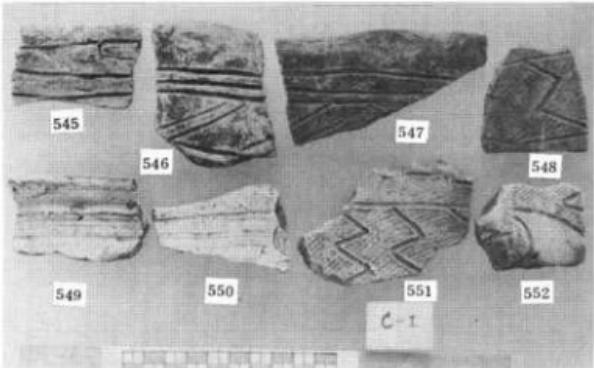


[527～544]→ここに掲げたものは、すべて縄文時代後期初頭「十腰内I式」土器である。これらは、壺形・深鉢か変形土器であろう。

- このうち、口頸部破片が(527～529・531・532・536・537・541・543)で、他は頸部より胴部破片である。(なお530は壺形である。)
- ④これら「十腰内I式」土器の施文パターンは多様である。そのことを、つぎの(P・L79～P・L81)および、G、H、iグリット出土のもとのあわせて参照されたい。

〔C地区住居址内Ⅲ層出土、土器〕

P・L 79



- 124 -

[545～552]→ここに掲げたものは、縄文時代後期初頭「十腰内I式」土器である。

- このうち、(548・552)は、胴部、他はすべて口頸部破片である。器形は(552)は壺形、他は変形土器であろう。
- 施文は、2～3条を基本とする沈線を、平行・斜行に施文するもの、垂下する曲線文および磨消縄文のあるもの等変化に富んでいる。

〔C地区住居址内Ⅱ層出土、土器〕

P・L 80



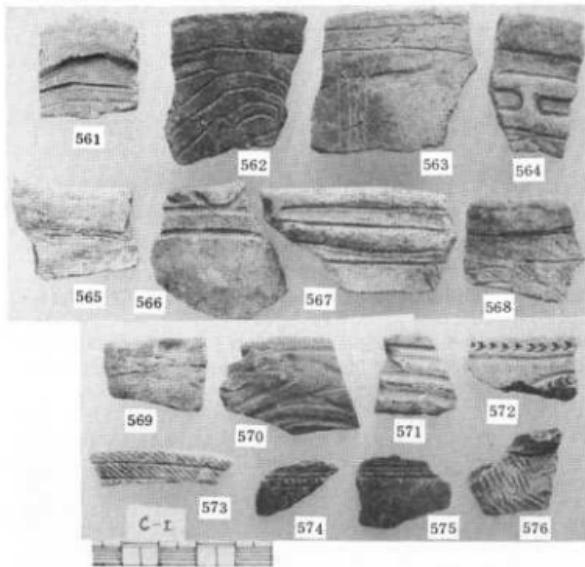
[553～560]→ここに掲げたものは、「十腰内I式」変形土器の胴部破片である。

- さきにも述べたように、方形区画文(553・554・556・557)、網目状文(555)、曲線区画文(558)、回旋文(559)等そのパターンを捉えることはむずかしい。

◎この「十腰内I式」期では、磨消縄文手法がよく発達した時期と考えられる。

〔C地区住居址Ⅲ-1層出土、土器〕

P・L 81

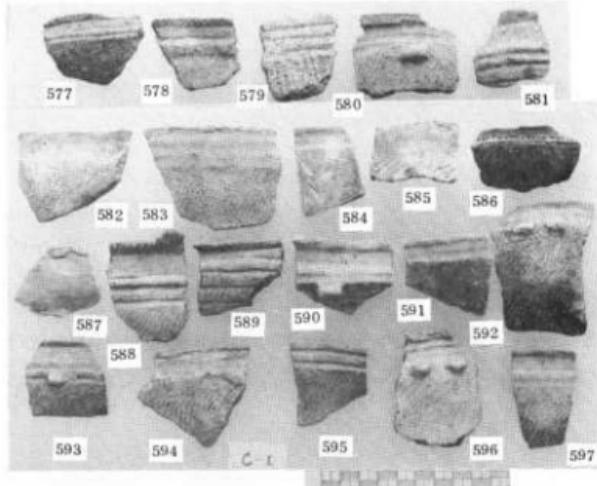


〔561～576〕→ここに掲げたものの上段(561～568)は縄文時代後期、「十腰内I式」土器、下段の(569・572・573)も、後期のもので(569)は不明、(572・573)は「十腰内II式」土器である。

・他の(574・575)は、「大洞C<sub>1</sub>式」、(570・571)は、「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

〔C地区住居址Ⅲ-1層出土、土器〕

P・L 82

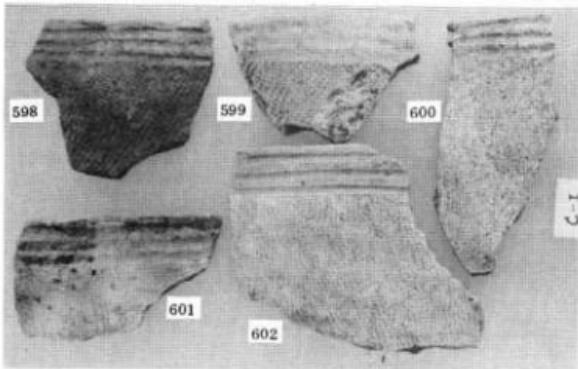


〔577～597〕→ここに掲げたものは、今まで記してきたものをまとめた意図で一括して示したものである。

- ・(585)は、縄文時代後期「十腰内I式」、他はすべて縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」土器群である。(但し、586はC<sub>1</sub>式である)
- ・これらのものは、鉢形か深鉢形土器と思われる。前百までのものと比較して、「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>式」土器の特徴を把握されればと思う。

〔C地区住居址N層出土、土器〕

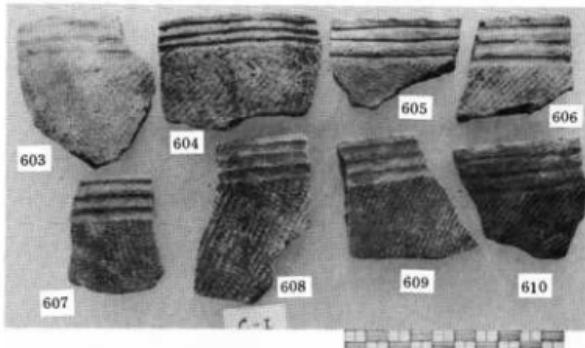
P・L 83



〔598～602〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。  
•これらのものはすべて平縁であるが、若干の小波状を呈するもの(598)もある。  
•口頸部には、既に述べてきたように3条の平行沈線文をもち、肩下部には、条痕文のあるもの(601)、縄文の施文されるもの(598～600・602)で縄文は(L・R)である。

〔C地区住居址N層出土、土器〕

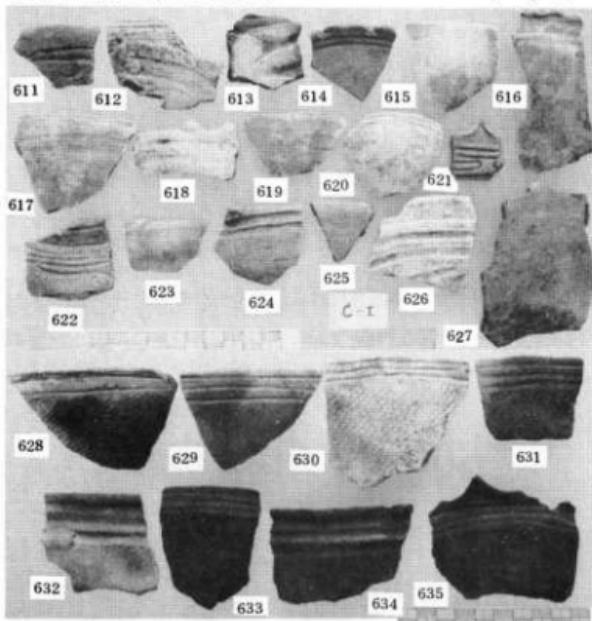
P・L 84



〔603～610〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。  
•すべて平縁であるが、(605)のように小波状のものもある。また、(603)は沈線の中に粘土粒をもつもので、つぎの、「A式」にまたがるものようである。  
•肩部下には(P・L 83)と同様、縄文が左傾するもの(603～606・608～610)、やや右傾するもの(607)で、前者は(L・R)、後者は(R・L)の燃糸文である。

〔C地区住居址Ⅲ層出土、土器〕

P・L 85

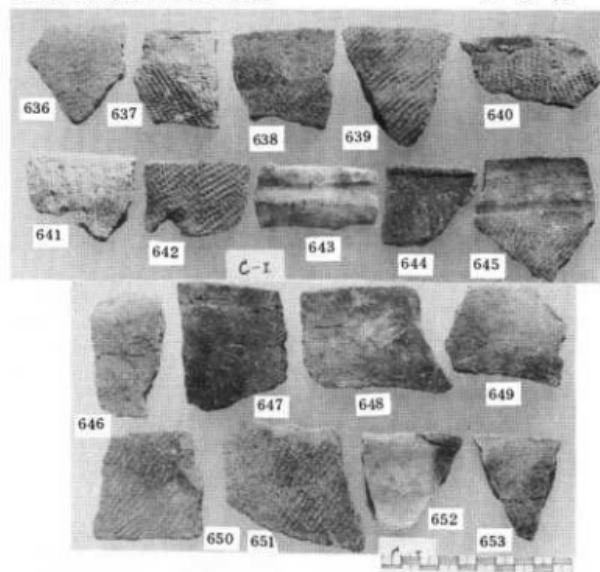


[611～635]→ここに掲げたものは「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」土器の粗製・精製土器である。

- このうち(613・614)は「大洞C<sub>1</sub>式」精製鉢形・皿形土器、(621)は、「大洞A式」精製土器で、他はすべて「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。
- (611・612・622・625)は、「大洞C<sub>2</sub>式」精製土器、他は粗製土器である。
- 下段の(628～635)は鉢形土器・深鉢形土器、また上段には皿形・鉢形土器を含んでいる。

〔C地区住居址Ⅳ層出土、土器〕

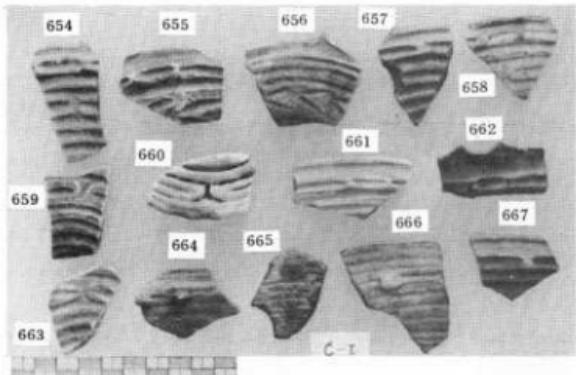
P・L 86



[636～653]→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。このうち(644)は、条痕文、(641)は撚糸文、(646～649・652・653)は無文のもので、(636～640・642・643・645・650・651)は網文の施文されるものである。

〔C地区住居址Ⅲ層出土、土器〕

P・L 87

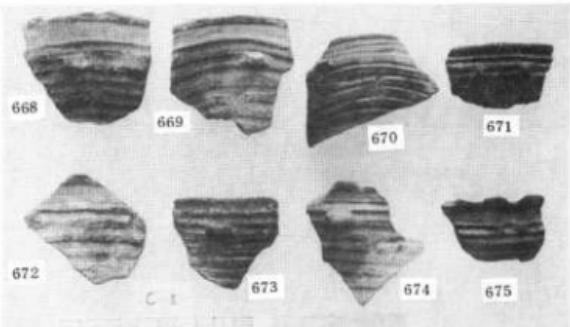


〔654～667〕→ここに掲げたものは「大洞A式」精製土器である。

- ・施文で分類すると、(656)は「矢羽根状文」(綾杉文)、他はすべて「入り組み工字文」である。
- ・器形は、(654～658・661・667)は皿形土器、(660)は、台付土器の台部、(659・662～666)は鉢形か深鉢形土器である。
- ④このうち、(655)は「入り組み工字文」が未完成のようであって、「大洞C式」後半に出現するようである。

〔C地区住居址Ⅲ層出土、土器〕

P・L 88

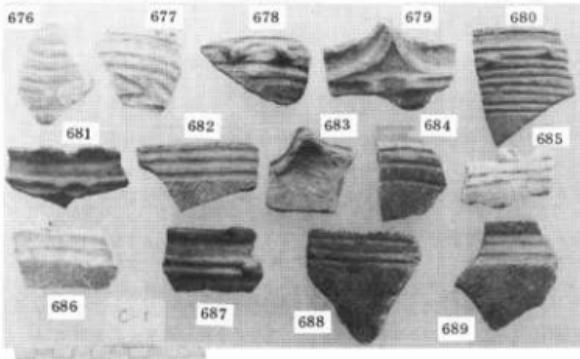


〔668～675〕→ここに掲げたものも「大洞A式」精製、粗製土器である。

- ・このうち、(671・675)は、粗製鉢形土器で、沈線の中に小突起をもつものである。
- ・他は、鉢形精製土器で、メルクマールの「入り組み工字文」が胴部に施文される。
- ・これらの中には、平縁のもの(669～671・673)、口縁に小突起をもつもの(668・674・675)に分けられる。

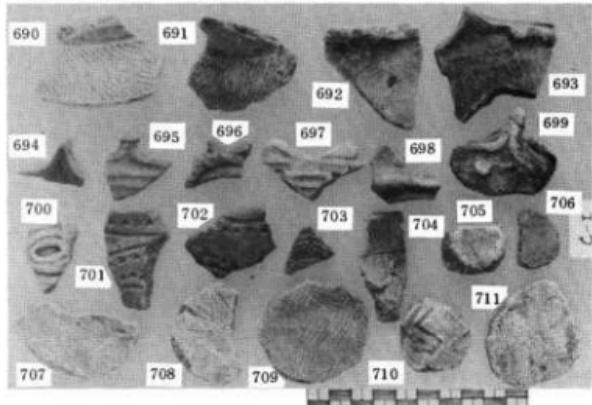
〔C地区住居址Ⅲ・Ⅳ層出土、土器〕

P・L 89



〔C地区住居址Ⅲ～Ⅰ層出土、土器〕

P・L 90



〔676～689〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>・A式」精製・粗製土器である。

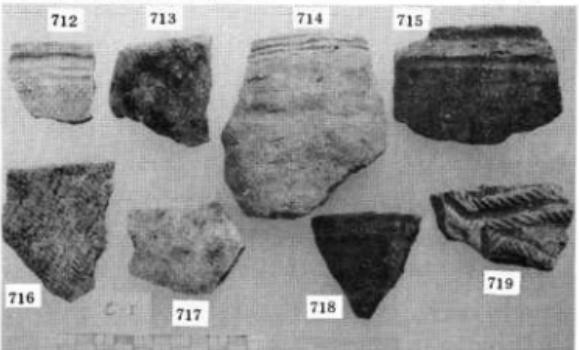
- このうち、(682～689)は「大洞C<sub>2</sub>式」土器で、(676～681)は「大洞A式」土器である。
- (682～689)のうち、(682・688)は深鉢形、(685・686)は皿形、(683・684・687・689)は鉢形土器である。(Ⅱ層)
- また、(676～681)のうち、(676・677・678)は精製、(679～681)は粗製鉢形土器であろう。(Ⅲ層)

〔690～711〕→ここに掲げたものは縄文時代中期・後期・晩期の土器・土製品を一括した。

- このうち、(706～711)は土器片を活用した円盤状土製品である。また(705)は底部で袖珍土器、(704)は不明で類例を待って考えたい。(700)は、これも断定できないが「円筒下層d<sub>2</sub>式」のようである。
- (701～703)は、「後期十腰内Ⅱ式」土器である。
- 他の(690～699)のうち、「晩期大洞C<sub>2</sub>式」が(690～695・697)で、(699)は、「大洞A式」、(696・698)は破片のため不明である。

〔C地区住居址Ⅱ層出土、土器〕

P・L 91



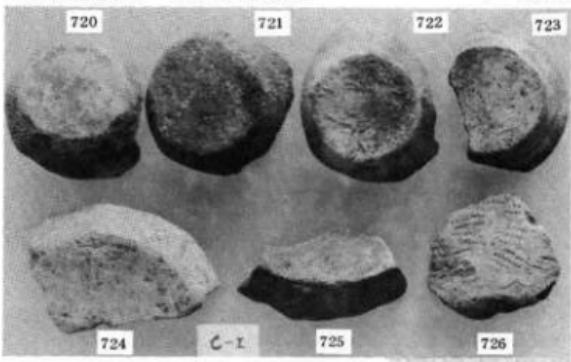
〔712～719〕→ここに掲げたものは、縄文時代中期・晩期の土器である。  
• このうち、(719)は縄文時代中期「円筒上肩式」土器である。器表面に隆起線文が施文される。型式名は断定できないのであるが「円筒上肩a式」または「同b式」であろう。

• (712～718)は「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形土器である。このうち(712・715)は、頸部が無文帶をなすものである。(714)は、3条の沈線文が施文されるもの。(713・716～718)は縄文が全面に施文されるタイプである。

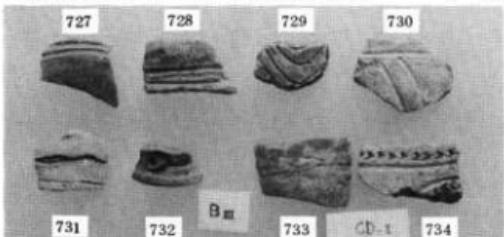
◎(712・718)は沈線文が肩部まで下るもので、頸部が無文帶をなす点に留意したい。

〔C地区住居址Ⅱ・Ⅲ層出土、土器〕

P・L 92



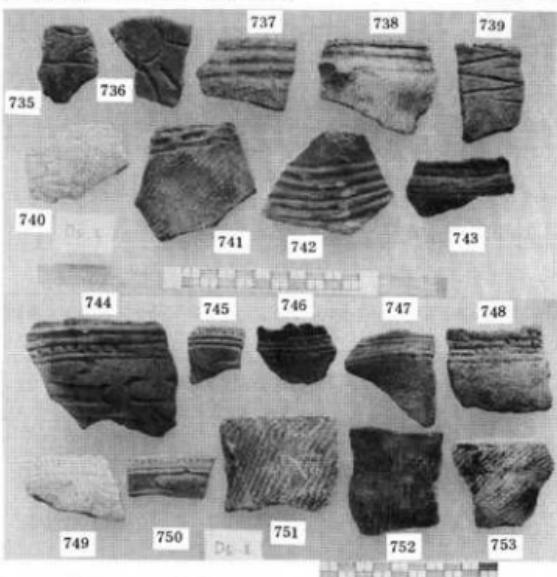
〔720～726〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>2</sub>式」粗製土器の底部である。  
• (720～723)は、やや上げ底のものであり、(724～725)は平底で、(726)は底部直上の破片である。



〔727～734〕→ここに掲げたものは、B地区およびCDトレンチより出土した縄文時代後期「十腰内I式・II式」深鉢形土器と縄文時代晚期「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

- ・(728～731)は「十腰内I式」、(734)は「同II式」である。(N層)  
また、(727)は「大洞C<sub>2</sub>式」、(732)は「同C<sub>1</sub>式」土器である。(I層)

◎(733)は「大洞C<sub>2</sub>式」に伴うものであるが「同C<sub>1</sub>式」に初現するかも知れない。

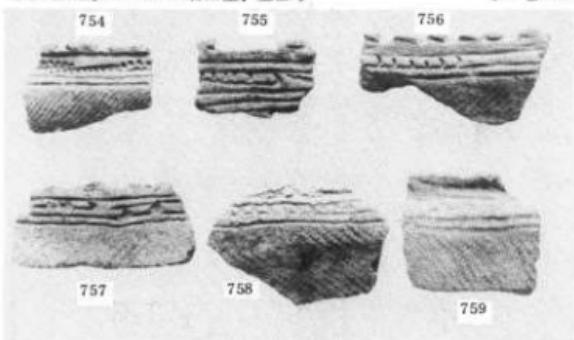


〔735～753〕→ここに掲げたものは「十腰内I式」および「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」粗製・精製土器である。

- ・このうち(735・736)は「十腰内I式」深鉢形土器、(741)は「大洞A式」粗製深鉢形土器である。
- ・(739・740・743～750)は「大洞C<sub>2</sub>式」鉢形土器で、このうち(740・744・745・749・750)は精製、他は粗製である。
- ・(737・738・751～753)は「大洞C<sub>1</sub>式」粗製深鉢形土器である。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 95



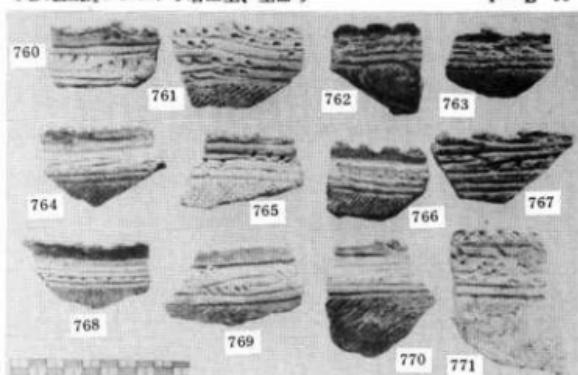
— 132 —

[754～759]→ここに掲げたものはすべて「大洞C式」粗製鉢形か深鉢形土器である。

- ・口縁には小突起をつけ、頸部には平行・斜行する沈線文が施文され、刻目文が付されるものである。
- ・肩部より胴部には、縦文(L・R)が付されるもの(754・756・757)で、(R・L)のもの(758・759)である。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 96

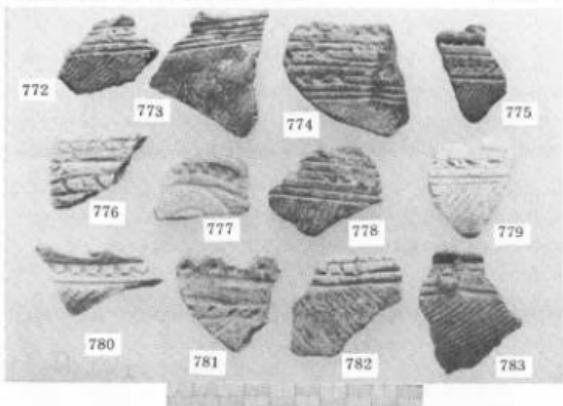


[760～771]→ここに掲げたものも「大洞C式」粗製鉢形土器である。

- ・このすべての土器の口縁は、小波状を呈するもので(761・770)のように山形突起をもつものもある。
- ・口縁より頸部にかけては(P・L 95)で述べたように、平行・斜行する沈線文と刺突による刻目文が施文される。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 97



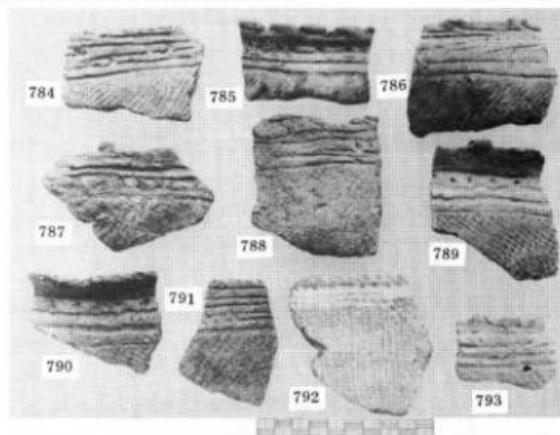
133

〔772～783〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>式」粗製・精製鉢形土器である。

- このうち(777)は精製、他はすべて粗製鉢形土器である。
- 口縁は平縁のもの(774・776・782)、他は小突起を有するもの、小波状を呈するもの等に分けられる。(780)は強く外反する口縁を有するものである。
- 口縁下部より肩部・胴上半へかけては、平行沈線文と刻目文があり、「大洞C<sub>1</sub>式」の特徴をもっている。
- 施文される縄文は、(782)は(R・L)で、他は(L・R)が多い。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 98

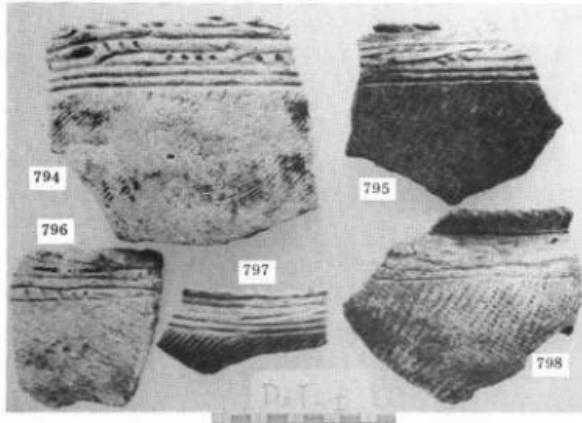


〔784～793〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>1</sub>式」粗製・精製鉢形・深鉢形土器である。なお、(785)は精製鉢形土器である。

- このうち、(788・789・791・792)は深鉢形、他は鉢形土器と思われる。また、口縁部が強く外反するもの(785・789・790)、直口に近いもの(784・787・788・791・792・793)、肩部がまるく弧るもの(786)に分けられる。
- 施文は、(P・L 95～97)と同様平行・斜行する沈線文と刻目文である。
- 肩部より胴部の縄文は(L・R)が多く、(792)は(L・r)撚糸文である。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 99



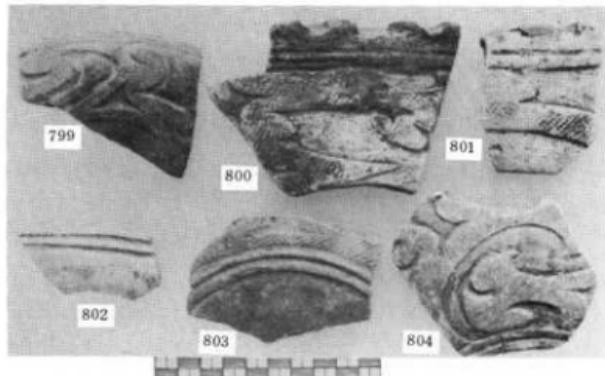
- 124 -

〔794～798〕→ここに掲げたものも縄文時代晩期「大洞C<sub>1</sub>式」粗製鉢形・深鉢形土器である。

- このうち(794・796)は深鉢形土器で、(795・797・798)は肩部がふくらむ鉢形土器である。(なお、798は広口壺の可能性もある)
- 施文は、(P・L95～98)でも述べたとおり、平行・斜行する沈線文と刻目文である。なお(794・795)は「大洞B・C式」の羊齒状文の伝統が残るものである。
- 腹部の墨文は、すべて(L・R)であるが(796)は右傾する。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 100

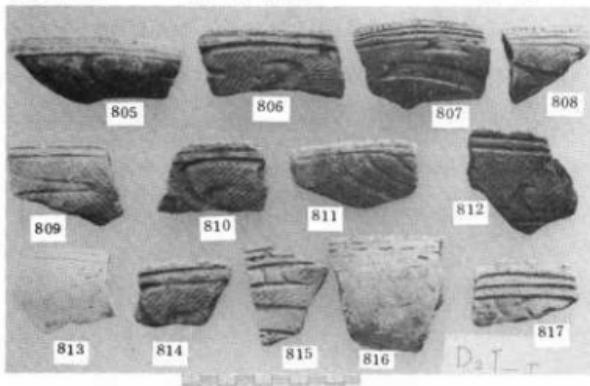


〔799～804〕→ここに掲げたものは「大洞C<sub>1</sub>式」「大洞C<sub>2</sub>式」精製皿形土器である。

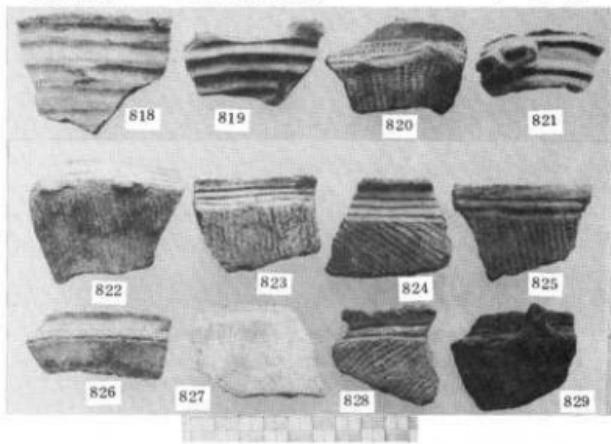
- このうち、(799・802・803)は「大洞C<sub>2</sub>式」、(800・801・804)は「大洞C<sub>1</sub>式」である。
- (799・803)は雲形文が横方向に流れ、のびているものであろう。
- (800・801)は、大穂骨文の施文(804)はK字文と思われるものである。また、(802)平行沈線文が口様下に2条あるもので「大洞C<sub>2</sub>式」である。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 101

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 102



[805～817]→ここに掲げたものは「大洞C<sub>1</sub>式」の粗製・精製皿形土器である。

- このうち(816)は粗製、他はすべて精製土器である。このうち(813)は胸部が無文で、口縁に2条の沈線がある。他は破片のため単位文様は不明なるも、刻目文のあるもの(805・807・808・811・815)、および(806・809・810・812・814・817)は力強い浮文を見せるものである。

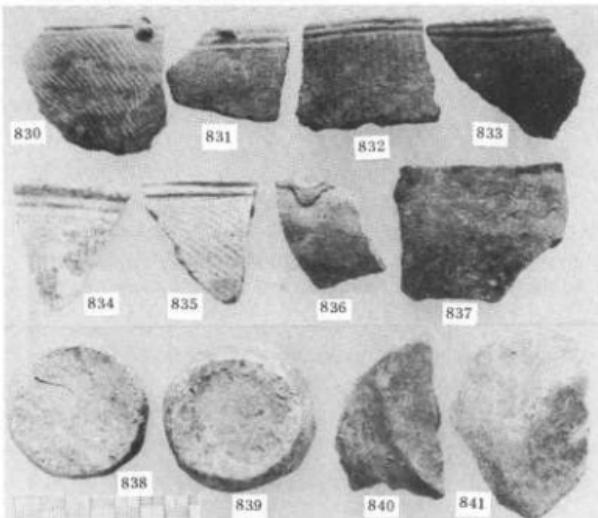
[818～829]→ここに掲げたものは「大洞C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・A式」の精製・粗製鉢形土器および台付土器の台部である。

- このうち(819)は鉢形、(821)は台付土器の台部で「大洞A式」の精製土器、(818)は「同A式」粗製鉢形土器である。

- (828)は口縁の小波状突起等から「大洞C<sub>1</sub>式」、(820・829)も同型式である。また、(822～827)は「大洞C<sub>2</sub>式」土器である。

〔D地区D<sub>1</sub>トレンチI層出土、土器〕

P・L 103



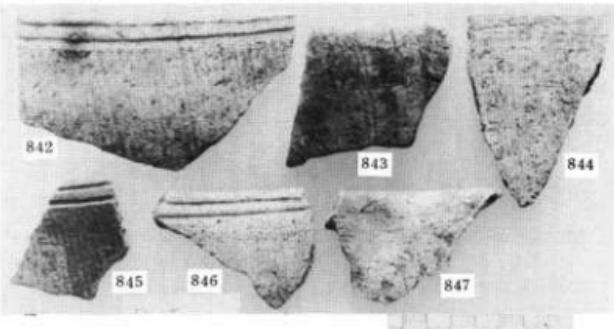
- 195 -

〔830～841〕→ここに掲げたものは、縄文時代晩期「大洞C<sub>2</sub>式」粗製鉢形、または深鉢形土器、および土器底部である。

- このうち、(830～837)は鉢形か深鉢形、(838～841)は、土器の底部である。
- 鉢形土器のうち、(830)は右傾する縄文、(831～833)は縱位の撓糸文、(836)は無文で小形のものである。
- また、(834・835)は撓糸文・斜縄文が施文されるもので(837)は無文のものである。
- (838～841)のうち、(838・840)は平底、他はやや上げ底である。

〔D地区D<sub>1</sub>トレンチI層出土、土器〕

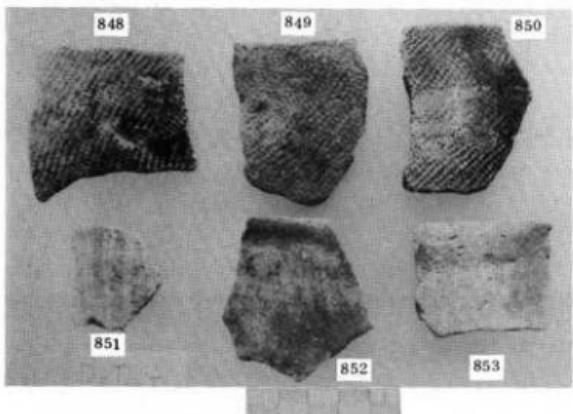
P・L 104



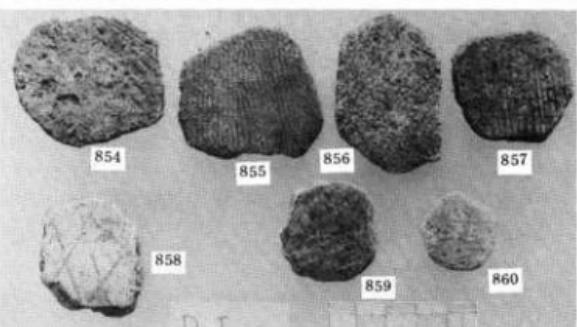
〔842～847〕→ここに掲げたものも「大洞C<sub>2</sub>式」粗製深鉢形土器である。  
 • ここに示したものは、すべて条痕文の施文されるものを一括した。このうち(842・845・846)には、口縁下に2条の平行沈線文が施文されるものであるが「大洞C<sub>2</sub>式」では、出土数が少ないものである。

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチⅠ層出土、土器〕

P・L 105

〔D地区D<sub>2</sub>トレンチⅠ層出土、土器〕

P・L 106



〔854～860〕→ここに掲げたものは「円盤状土製品」である。

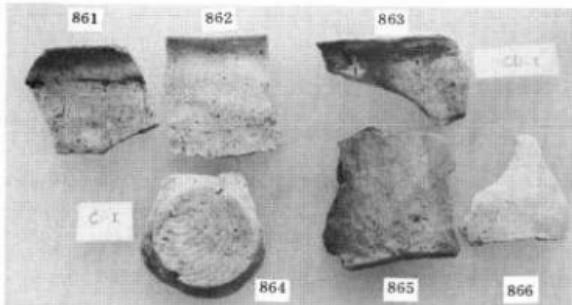
- このうち(858)は「十脛内Ⅰ式」の土器片を活用したものである。
- 他の(854～857・859)には、縞文のあるもの(854・856・859)、撚糸文のあるもの(855・857)、無文のもの(860)であるが、これらのものの型式を決定することはむずかしいが、晩期のものと考えられる。

〔848～853〕→ここに掲げたものは、「大洞C<sub>2</sub>式」粗製變形か深鉢形土器である。

- (848～850)は、口縁下より二段単節(L・R)縞文が施文されるものである。
- (851)は、深鉢形胴部下半の破片で、条痕が特異で浅い。この施文のものはあまり類例のないものである。
- (852・853)は、無文で、口縁部が肥厚するものである。

## 〔各地区出土、土師器〕

P・L 107

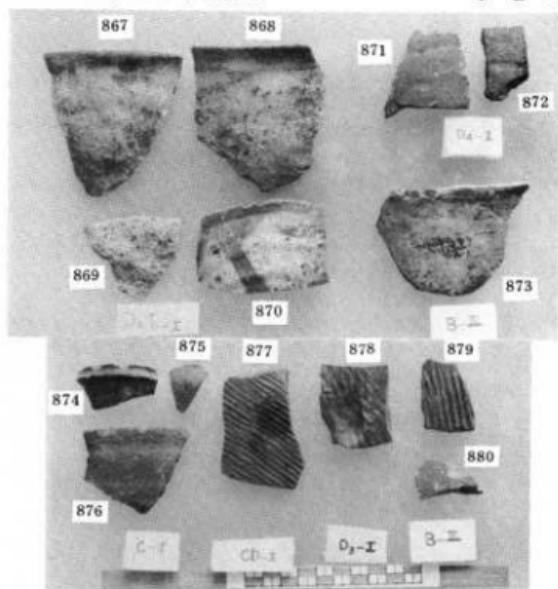


〔861～866〕→ここに掲げたものは、C地区住居址内およびC地区CDトレンチI層出土の土師器である。

- (861～863)は、C地区住居址内出土、(864～866)はC地区CDトレンチI層出土の土師器である。
- このうち、(861・862・864・865・866)は菱形土師器、(863)は糸切り痕のある环形土器底部である。
- ◎これらの土師器は、口縁部の形態、糸切り痕から「東北北部土師器型式」第二型式である。

## 〔各地区出土、土師器、須恵器〕

P・L 108



〔867～880〕→ここに掲げたものも各地区出土の土師器・須恵器である。

- このうち(873・880)は、B地区N層出土、(874・875・876)はC地区I層出土、(877)はCDトレンチI層出土、(867～870)はD地区D<sub>2</sub>トレンチI層出土、(878)はD地区D<sub>3</sub>トレンチI層出土、(871・872)はD地区D<sub>4</sub>トレンチI層出土である。
- これらの土師器は(P・L 107)で述べた土師器第二型式、須恵器は長頸壺(871・872・874・875・876・880)、菱形(877・878・879)である。

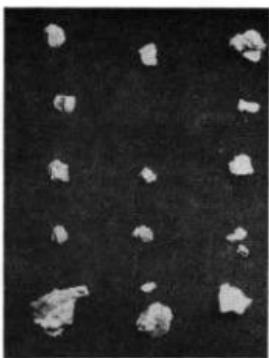
〔観音林遺跡出土骨片〕

b 写1

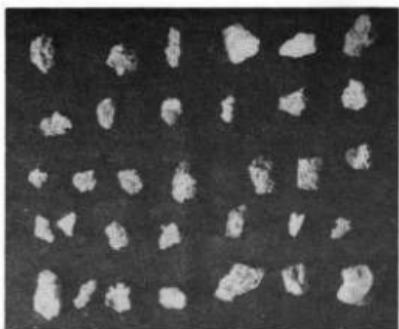
No. 1 7号土壌内



No. 2 AH<sub>2</sub>-I



No. 3 AH<sub>2</sub>-I



No. 4 C-II (カマド内) No. 5 D<sub>2</sub>-中-III



No. 6 B-I



No. 7 D<sub>5</sub>-I



No. 8 AH<sub>2</sub>-II

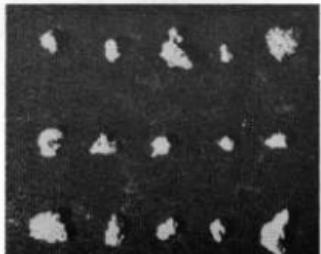
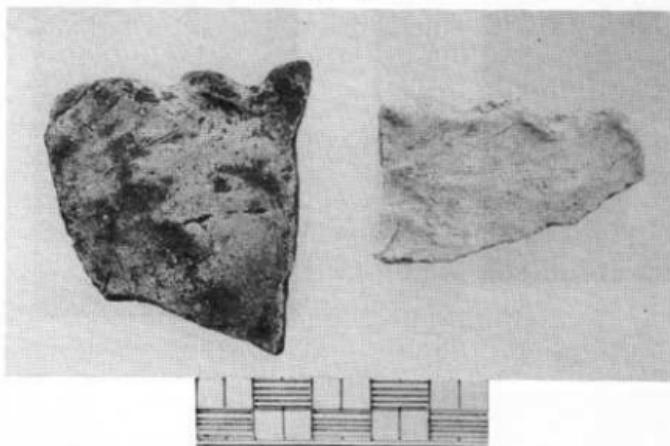
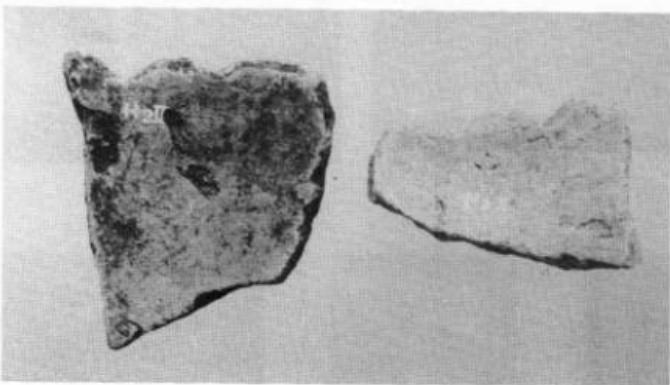


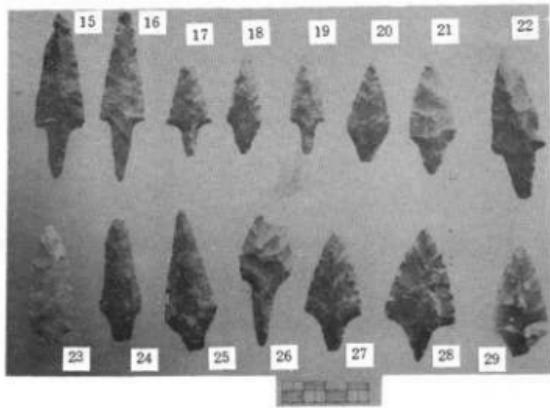
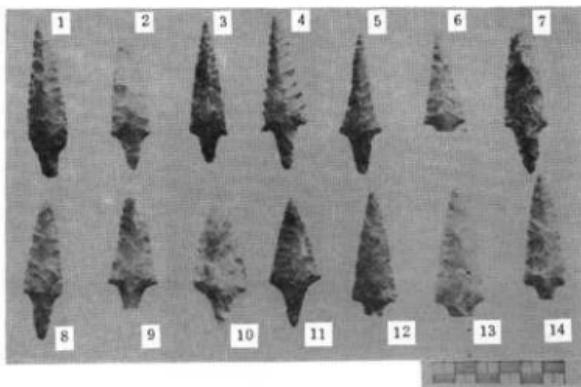
表 面

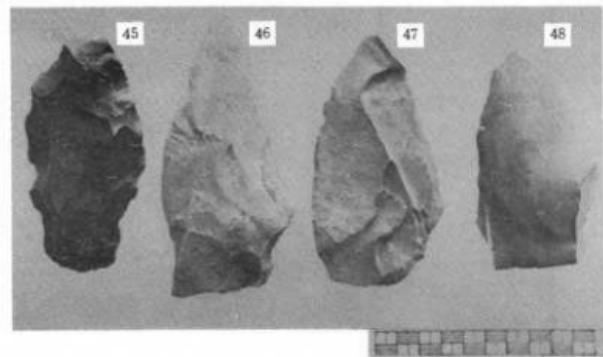
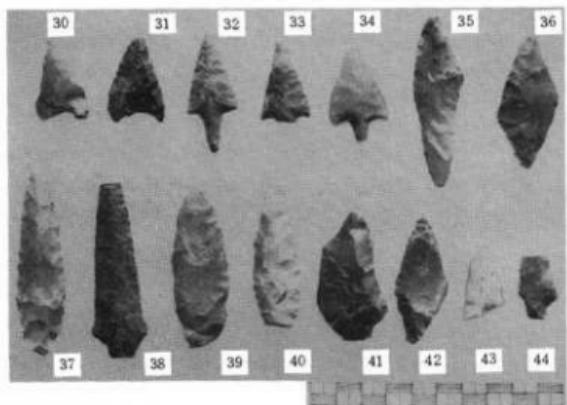


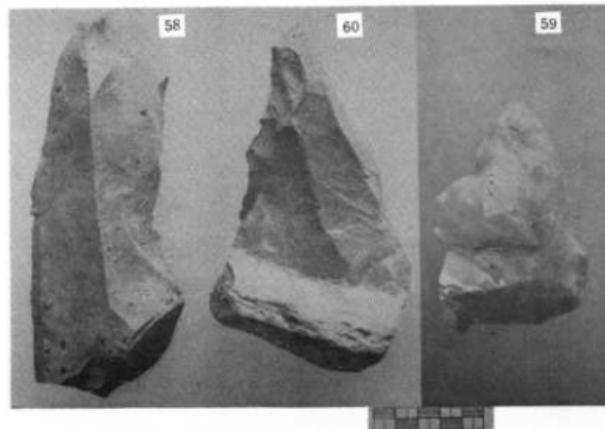
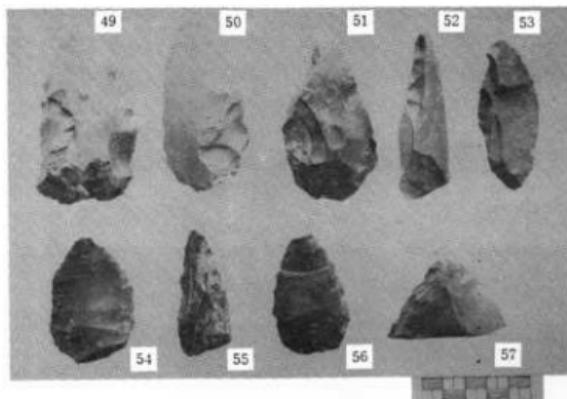
同上 裏 面



(注) A地区H<sub>2</sub>-II層出土の製塙土器である。器表面より内面の整形がよく、器表面がざらざらしているのに対して内面は平滑である。胎土に細砂を含み焼成は良い。色調は内外とも黄褐色である。

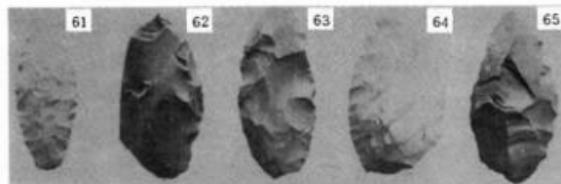




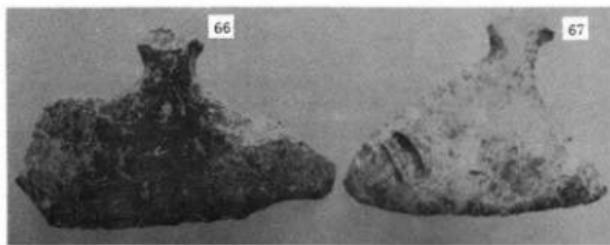


〔石槍・横形削器〕(61～65・66・67)

S・P・L 7

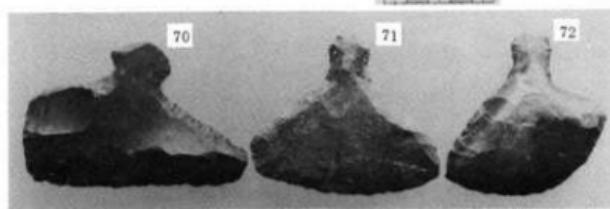
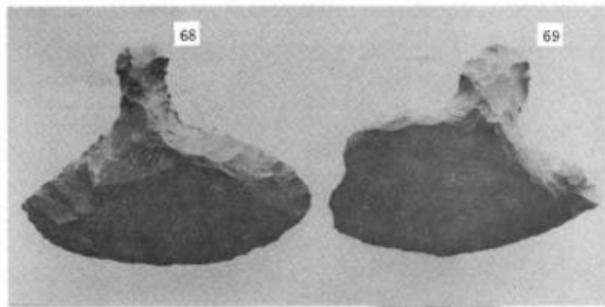


(side-scraper)



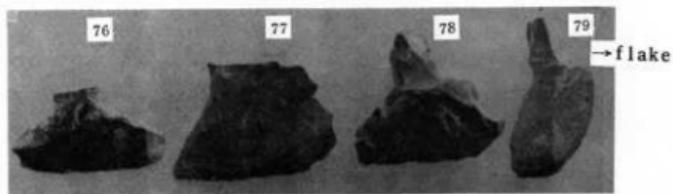
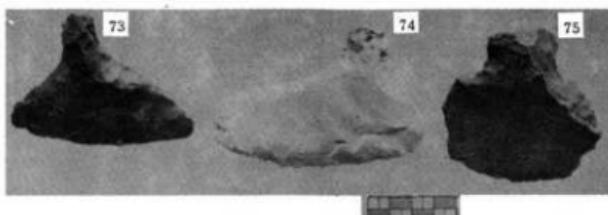
〔横形削器〕(68～72)→side-scraper

S・P・L 8



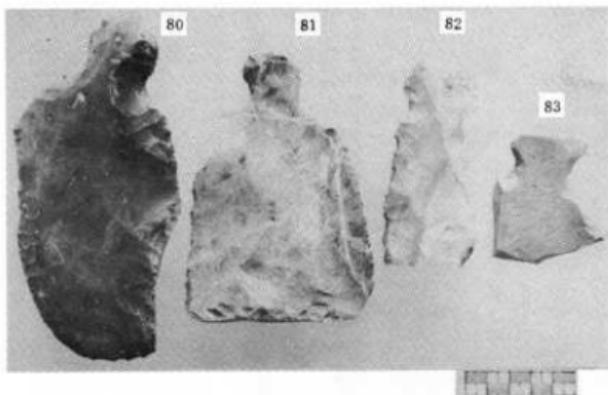
[ 横形削器 ] ( 73~79 ) → side-scaper

S • P • L 9



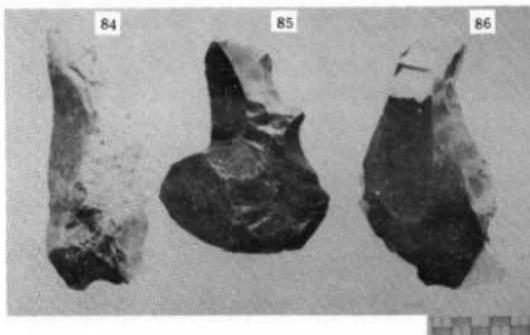
[ 縱形削器 ] ( 80~83 ) → side-scaper

S • P • L 10



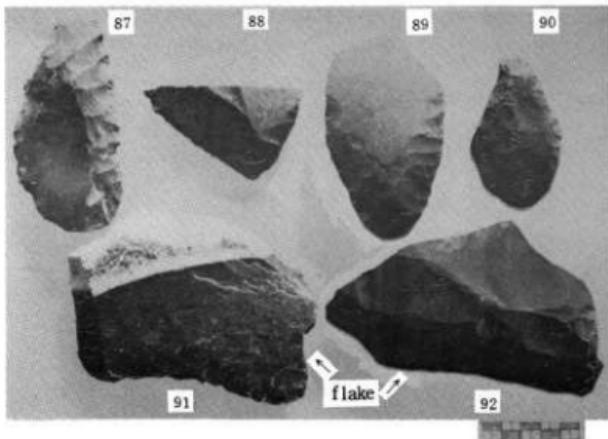
〔不定形削器〕(84~86)  
(flake活用)→未完成

S・P・L 11



〔不定形削器〕(87~92)

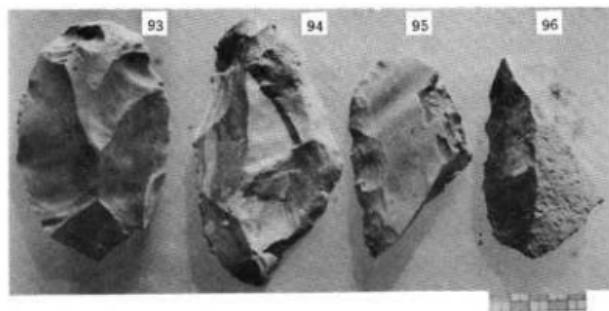
S・P・L 12



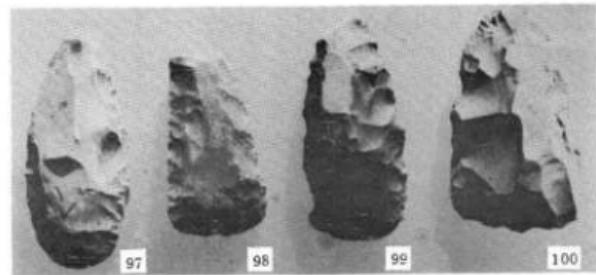
[ 不定形削器・撥器 ] ( 93~96 • 97~100 )

S • P • L 13

( 不定形 *scraper* → )

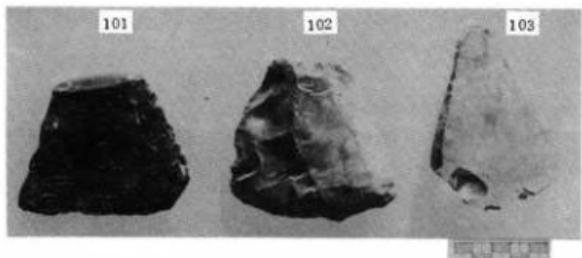


( end-scraper → )

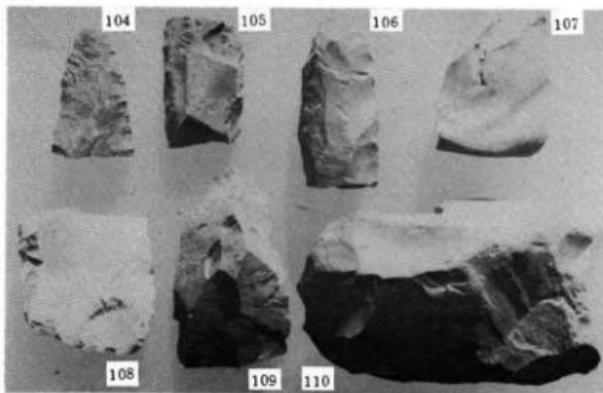


〔 搾器・不定形攝器 〕 ( 101 ~ 103 + 104 ~ 110 )  
( end-scraper → )

S · P · L 14

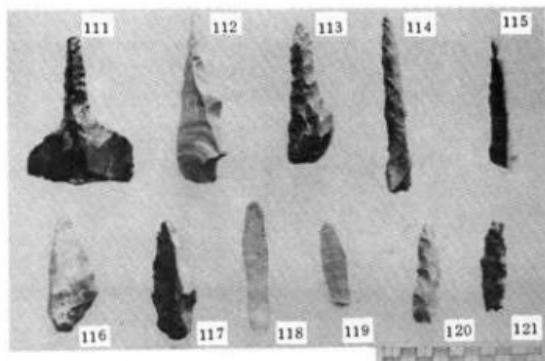


( 不定形 → )



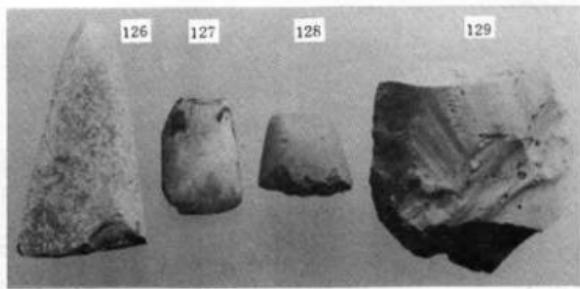
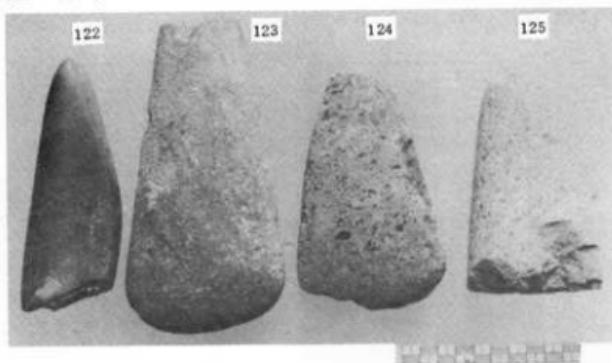
〔石錐〕(111~121)→drill

S・P・L 15



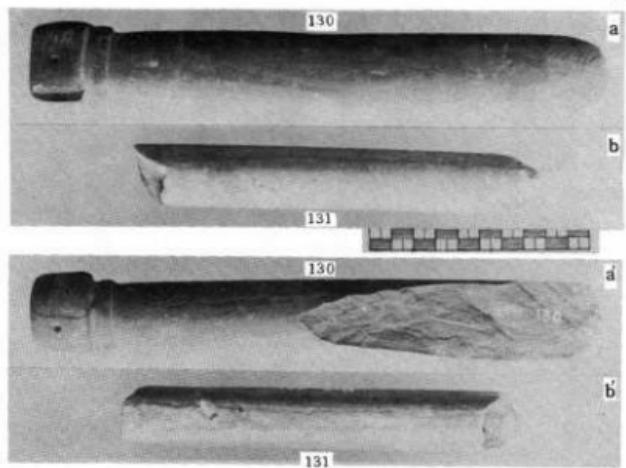
〔石斧〕(122~129)

S・P・L 16



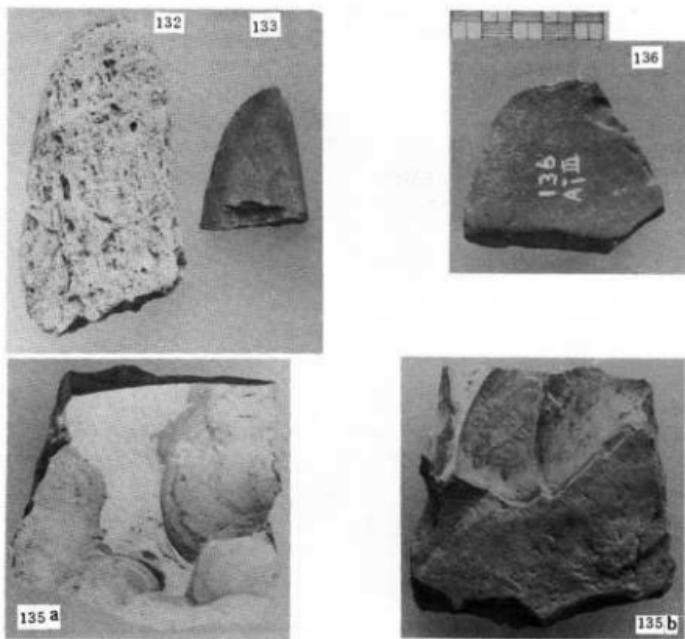
〔石棒〕( 130 ~ 131 )

S · P · L 17



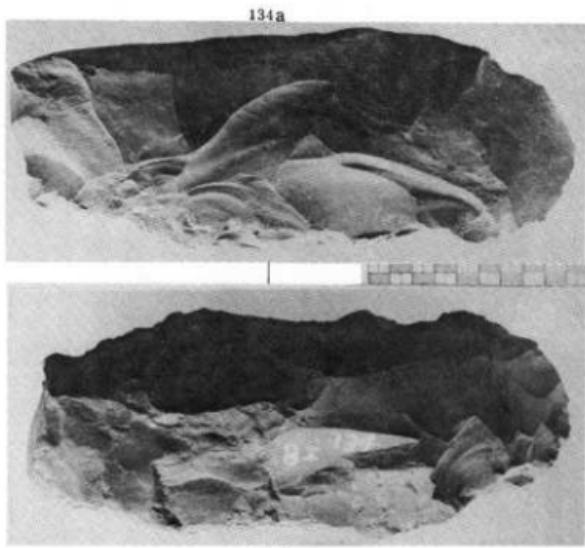
〔石刀状石器・鉈状石器〕( 132、133 + 135 ~ 136 )

S · P · L 18



〔大形搔器〕( 134 ) → end-scraper

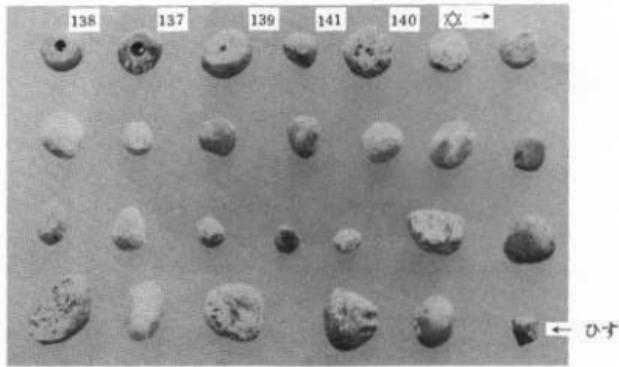
S · P · L 19



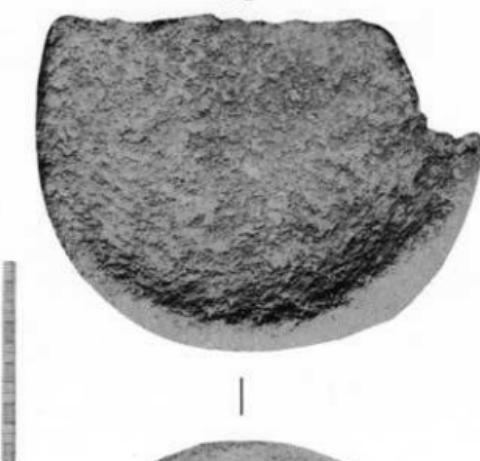
134b

〔小玉・小玉原石〕( 137 ~ 141 • ☆→ )

S · P · L 20



142a



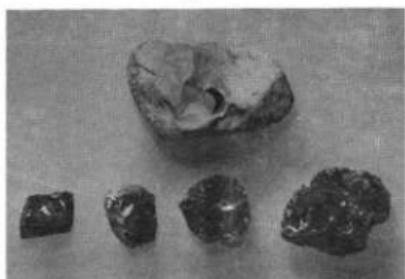
142b



[穿孔石・黒曜石片] ( 143 + 216 ) S · P · L 22 [鞋石・球形石器] ( 144 + 145 ~ 146 ) S · P · L 23

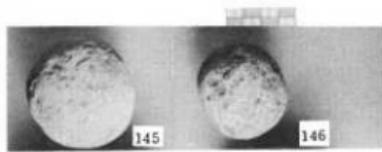
143a

← 144 →



← 216a →

143b



[石錐・石製壺底部・楕円形扁平石器] ( 147 ~ 148 + 149 + 150 ~ 151 ) S · P · L 24

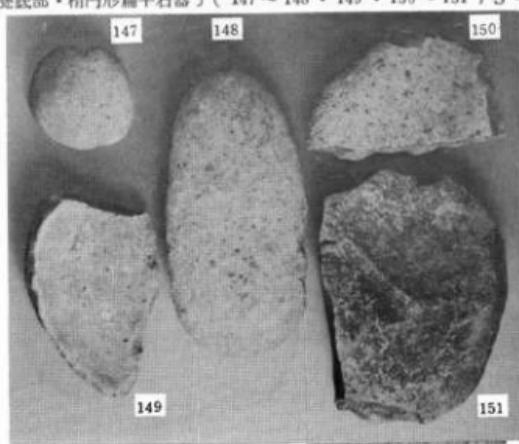
147

148

150

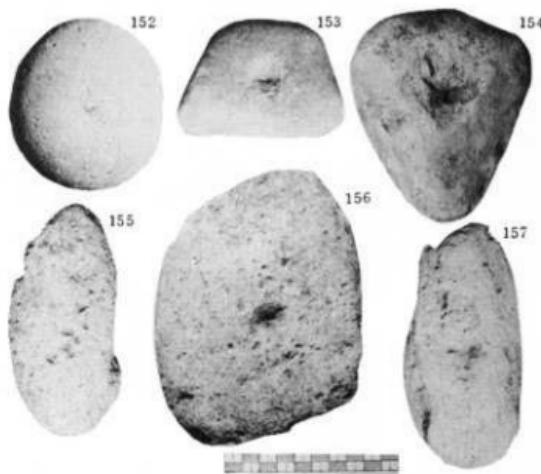
149

151



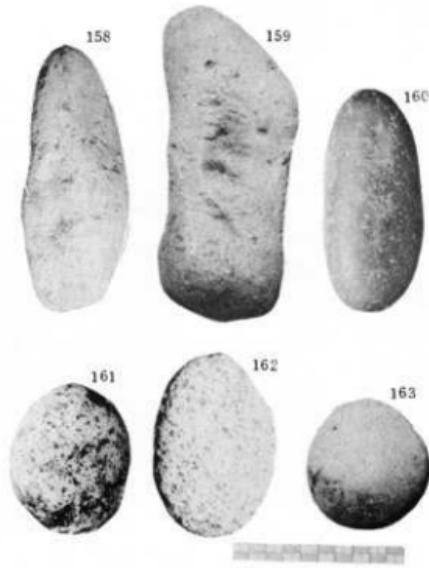
[ クボミ石 ] ( 152 ~ 157 )

S • P • L 25



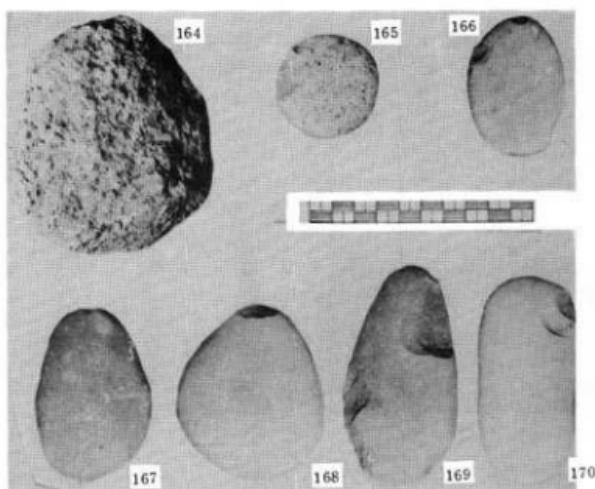
[ クボミ石・タタキ石 ] ( 158 ~ 159 + 160 ~ 163 )

S • P • L 26



〔タタキ石・打欠きと磨痕のある扁平石器〕( 164・165～170 )

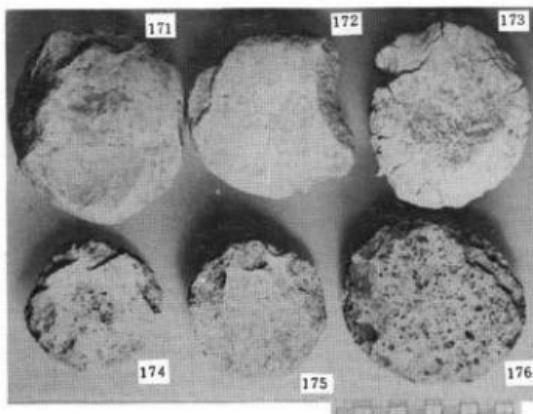
S・P・L 27



〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕( 171～176 )

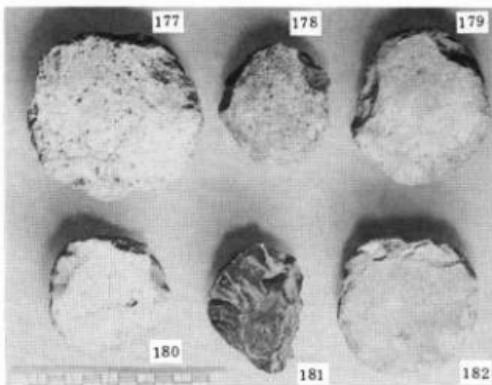
S・P・L 28

( 不正円形 )



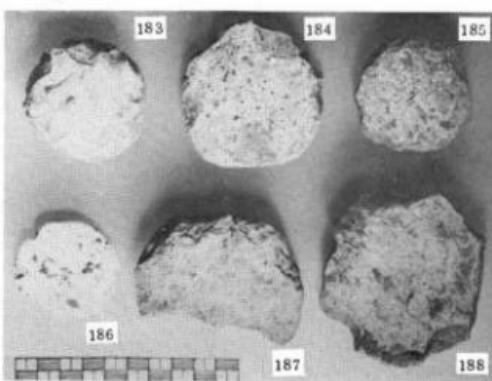
〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕( 177 ~ 182 )  
( 不正円形 )

S • P • L 29

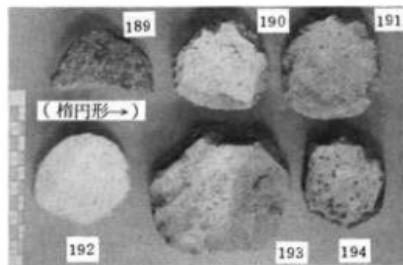


〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕( 183 ~ 188 )  
( 不整円形 → )

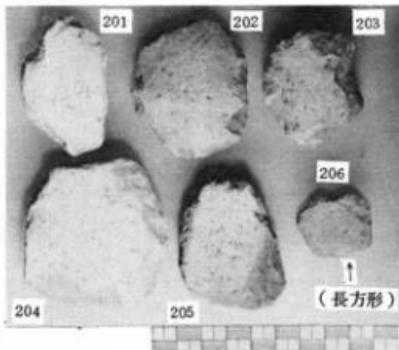
S • P • L 30



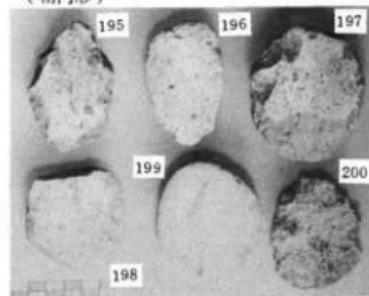
〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕  
( 189 ~ 191 • 192 ~ 194 ) S • P • L 31  
( 不整円形 → )



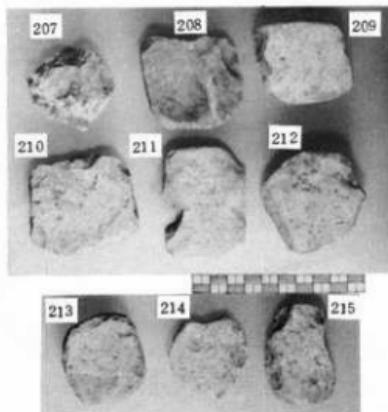
〔周辺に打欠きのある円盤状扁平器〕  
( 201 ~ 205 • 206 ) S • P • L 33  
( 楕円形 → )

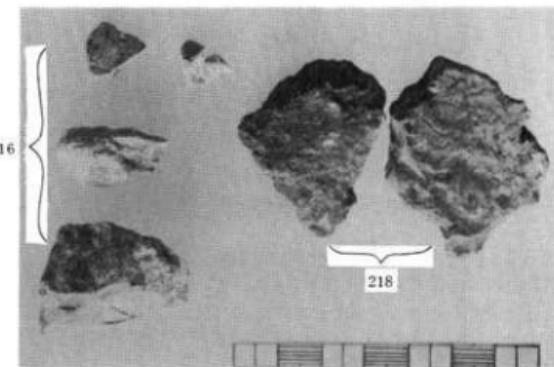
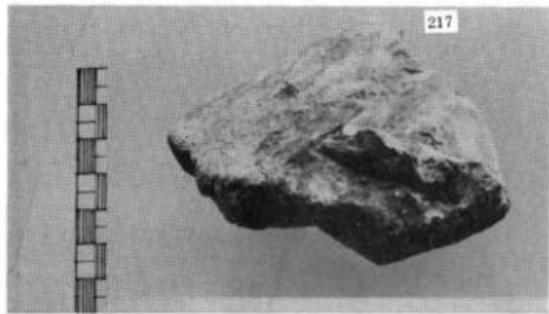


〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕  
( 195 ~ 200 ) S • P • L 32  
( 楕円形 )



〔周辺に打欠きのある円盤状扁平石器〕  
( 207 ~ 215 ) S • P • L 34





☆ ( 216 → S • P • L 22 )

## あとがき

昭和49年に観音林遺跡の第一次試掘調査を手がけさせていただき、以後昭和58年に第二次、同59年に第三次発掘調査と引き続き担当できたことが、考古学・地学を学ぶ者にとって無上の幸せと考えるところであります。過去約10年間にわたって当遺跡の推移を見つめてきたのであるが、縄文時代～歴史時代にわたる当遺跡の全体像は、なかなかその姿をあらわしてくれない遺跡である。

ただ出土遺物を見る限りでは、縄文文化の華と言われる晩期の土器群の美しさと縄文人の生活力の素晴らしさに驚くばかりであった。

また1kmにも及ぶ堀状遺構を構築しなければならなかつた社会的な背景はどうであつたのか、平安末から鎌倉期にかけての当遺跡の歴史的位置づけ等、今後に解明されなければならない問題を多く抱えている。

筆者等の力不足に起因する要素も多々あることと反省させられるところであるが、当遺跡の発掘を担当させて下さった五所川原市教育委員会当局の方々に感謝申し上げる次第である。

1985. 3. 20

(新谷・川村記)

## 参考文献

- |    |      |              |                |
|----|------|--------------|----------------|
| 1) | 1973 | 観音林遺跡(第一次)   | 五所川原市教育委員会     |
| 2) | 1984 | 観音林遺跡(第二次)   | 五所川原市教育委員会     |
| 3) | 1983 | 五月女窪遺跡       | 市浦村教育委員会       |
| 4) | 1984 | 亀ヶ岡式土器       | 村越 潤 ニューサイエンス社 |
| 5) | 1974 | 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書 | 青森県教育委員会       |
| 6) | 1984 | 青森県考古学       | 青森県考古学会        |

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第八集  
観音林遺跡（第三次）

- 発行年月日 昭和60年3月20日
- 発 行 者 青森県五所川原市教育委員会  
代表 教育長 鈴木太左衛門  
住所 五所川原市岩木町12番地
- 著 者 新谷雄藏  
川村真一
- 印刷所 勉陸奥印刷

